

チェイサー

社会人になってすぐの頃、法事か何かの折に、定年間近の父と酒を飲んだ。私の仕事はどうだとか、父の定年後の夢とか、他愛もない話をしながら。母に似て酒にあまり強くない私を見て、父は「チェイサーを飲むとだいぶ違うよ。」とグラスに水を入れて差し出してきた。ただの水のことを大人は随分気取った呼び方をするんだなと思いながら飲み干した。確かに、身体の中でビールが薄まって、楽になった気がした。こうやって、辛い時に少しでも和らげる方法を身に付けておくに役に立つし、困っている人にそれとなく教えることができたらかっこいいのだろう。

それから、私は何かにつけて対処法を調べ、歯が痛い時は手の親指と人差し指の間のツボを押し、食べ過ぎた時は心臓を下にして（いわゆる回復体位）寝るなどのちょっとした医学を実践し、次第にそれが自分にとって当たり前の行為になっていった。子供の頃、怪我をしたら即座に傷に唾を塗りたいくってきた北海道のおばあちゃん、あれはただのまじないではなく、おばあちゃんの唾液に含まれるささやかながらの酵素やらの働きて傷の治癒を早めるという、科学的根拠のあるものだった。嫌がってごめんね。

こうして大体のことは自分で解決できるようになった自分にも、仕事で辛いことや恋愛で傷つくことはある。こればかりはインターネットで調べても確実な解決法が見つからない。そんな時、父の言葉を思い出し、私は気付いた。そうだ、解決できなくても薄めることはできる。平日の疲れのチェイサーに土日を、失恋のチェイサーに涙を、ということだったのか。

きっと私はこれからも大人の社会で生きづらさを感じては、私なりの対処法、私なりのチェイサーを見付けていくのだと思う。そして、その度に父のことを思い出すのだ。必死に働いて私たちを育て上げ、定年という人生のチェイサーを迎えた父のことを。

(A.T)

